

英国紳士のハコダテノート / 作：橋本茉里

英国紳士のハコダテノート

橋本
茉里

あらすじ

東京で失恋をした高橋聖依子（30）は、仕事を辞め故郷の函館に帰郷し、兄・高橋柗二（42）の経営するBARを手伝いながら転職活動をしていた。

だが、面接は落ち続けて上手くいかず、冗談で婚活を始めようかと言うほど悶々とした日々を送っている。

そんなある日、聖依子は友人の大熊紗智（29）に誘われ、旅行客向けのガイドボランティアに参加。しかし、そこで外国人観光客に声を掛けられパニックになる。

そんな時、助けてくれたのはイギリス人旅行ライターのデイラン・オーウェル（34）であった。デイランにお礼をしたいと申し出た聖依子は、祖先の友人探しを手伝ってほしいと頼まれる。

デイランの祖先であるヒューゴ・オーウェル（23）は、幕末の函館でイギリス領事館職員として働いていた人物。当時の記録を残

したノートには、角田辰之助（23）と鳴無志摩子（16）の名があり、デイランはヒューゴが残した忘れ物をこの友人達の子孫に届けたいというのである。

聖依子は、無謀な事だと思いつつ、つい引き受けてしまう。

イギリスに帰るデイランからノートを預かった聖依子は、転職もそっちのけで紗智にも手伝ってもらい、ヒューゴの手記を読み始める。

そこには、志摩子との出会いから、角田との友情、アイヌ人遺骨窃盗事件での葛藤。そして、ヒューゴが志摩子に対する想いが綴られていた。

ちようど時を同じくして、聖依子は初恋の相手、林田寛人（42）と再会。いつしか、ノートに記されたヒューゴと志摩子の恋に引きずられる様に、忘れかけていた寛人への恋心を募らせていくようになる。

だが、寛人は聖依子に思わせぶりな態度を

とるばかり。ついに2人の関係がギクシヤクしたまま、寛人は札幌へ引っ越す事を決めてしまう。

そして、ノート以外の手がかりがつかめず、子孫探しも暗礁に乗り上げてしまう。

年末を迎えたある日。聖依子が家の蔵で正月飾りを探していると、志摩子の手紙を見つけ、ある事に気が付く。

年が明け、聖依子と日本に来たデイランは、東京に住んでいた角田の子孫に会いに行く。

そこで、聖依子は、ノートには記されていなかったヒューゴが去った後の志摩子と角田のその後、そして、自分との意外な関係を知る。

函館に帰った聖依子は、寛人に告白を決意する。

春が来て、デイランから志摩子宛ての忘れ物を受け取った聖依子は、気持ちを新たに、再び、転職活動を再開するのであった。

登場人物表

◇現代◇

高橋聖依子（30）無職・バー手伝い

高橋聖依子（6）幼少時

ディラン・オーウェル（34）旅行ライター

林田寛人（18）（42）バリスタ

高橋終二（42）

聖依子の兄・カフェ&バーのオーナー

大熊紗智（29）聖依子の友人・学芸員

角田真佐子（65）主婦

外国人観光客女

外国人観光客男

ギター奏者

カフェ&バーの客 数名

常連客 1・2

七夕で訪れた近所の奥さん

七夕の子供達 数名

◇幕末◇

鳴無志摩子（16）（18）鳴海屋の1人娘

ヒューゴ・オーウエル（23）（25）

イギリス領事館の館員

角田辰之助（23）（25）箱館奉行所の武士

ロイ・キャンベル（27）ヒューゴの同僚

田村久仁彦（40）箱館奉行所の管職員

ハワード・ワイズ（43）イギリス領事

鳴無庄左衛門（43）志摩子の父

鳴無英津子（0）志摩子の娘（声のみ）

○ 函館・全景

T・函館

函館ハリストス正教会の鐘の音。

○ 「OTONASI」・外観

教会の鐘の音が鳴り響く。

海近くの道路沿いに大きな蔵が併設された洋風町家型建築の建物。

「c a f e & B a r O T O N A S

I」と書かれた看板。

○ 同・聖依子の部屋

遠くから教会の鐘の音。

洋服や本が散らばった部屋。

本棚には、出版や編集に関わる書籍が並んでいる。

机の上には、履歴書や不採用通知が散乱。

ベッドには、毛布に埋もれて眠る高橋聖依子（30）、鐘の音に誘われるよう

に目を覚ましてボンヤリとする。
鐘の音が鳴り終わる。

聖依子、傍にあった時計を見る。
時間は12時過ぎ。

聖依子、急にはっと起き上がる。

聖依子「やっぱっ」

と、慌ててベッドから降りる。

○同・洗面室

聖依子、鏡の前で寝癖を整えている。
窓からの光で、一瞬、聖依子の瞳が深
緑色に見える。

○同・店内

バーカウンターと椅子やテーブルが並
ぶ店内。

奥のステージには、グランドピアノや
ギターなどが置かれている。

客席のソファーには高橋終二（42）
が、イビキをかいて寝ている。

2階から慌てて降りて来る聖依子、店内を小走りで通りすぎ、引き戸のカギを開ける。

聖依子「いつてきまーす」

と、引き戸を占める。開閉でベルが鳴る。

○同・外

聖依子、建物の横に停車している軽自動車に乗り込む。

車のエンジンがかかり、ラジオからのジャズ音楽が聞こえる。

聖依子の車が駐車場から出て行く。

○タイトル「英国紳士のハコダテノート」

○道路

路面電車と車が行きかう道路を聖依子の車が走っている。

○ 走る聖依子の車・外

聖依子、運転をしながら路面電車の駅にいる外国人観光客に、目を向ける。

○ 五稜郭・全景

桜が満開の五稜郭。

T.. 函館・五稜郭

○ 同・郭外の歩道

観光客が散策し、桜の下で花見をしている市民。

○ 同・花見会場

桜の下、ジンギスカンの煙が充満して客達で賑わっている。

聖依子、周囲を見回し歩く。

と、花見客の中から、大熊紗智（29）が聖依子を見つけて手を上げる。

紗智 「聖依子！ こっちこっち！」

聖依子、紗智に気が付く。

聖依子「ああ！」

と、ほっとしたように紗智の方に行く。

紗智の側には数名の男女が、ジンギスカンで酒盛りをしている。

聖依子「ごめん！」

と、周りに謝りながら紗智の横に座る。

紗智「何やってたのよ！」

聖依子「ちよつと、寝坊しちゃって、駐車場も見つかなくてさ」

紗智「当たり前でしょ！　いくら無職だからって、なんでこんな時間まで寝てるかな」

聖依子「だから、ほんとゴメンって。寝る前までは、早く起きるつもりだったんだけど」

紗智「お店手伝ってたの？」

聖依子「まあ……でも、12時前には上がったんだよ」

紗智「ああ、履歴書書いてたんでしょ」

聖依子「そんなところ」

と、ビールを手に取って飲もうとする。

紗智「こら、車で来たんでしょ」

聖依子「代行で帰るからいいの」

と、ビールを一気に飲む。

聖依子「あー、うまつ」

紗智「また全滅？」

聖依子「これで10社目です」

紗智「東京の経歴も、こっちじゃ役立たずか」

聖依子「本当、どこの会社も、面接に行った
ら口を揃えていうのよ。こんな立派な経歴
でうちの会社を受けるんですか？ って、
そう思うなら採用してよって感じ」

紗智「都会の微妙な経歴って逆に怖いんだよ。

それに、私達の歳だと、結婚してすぐやめ
そうだって、なかなか採用してくれないし」
聖依子「今どき、そんな時代錯誤な」

紗智「わからないわよ？ 函館だもの。全く、
東京で働いていけばいいものを、失恋ごと
きで帰って来るから」

聖依子「あー、もうそれ耳にタコ」

紗智「ま、いいじゃない。住むのも食べるの
にも困ってない。このまま、お兄さんのお

店手伝いながら、永久就職先探した方が早いかもね」

聖依子「ああ、たしかに。婚活サイトに登録しようかな」

紗智「婚活市場は、30代になった途端、売れ残るって話聞いたけど？」

聖依子「なにそれ。結局男は若い子の方いいのか！」

紗智、紙皿に肉を盛る。

紗智「ほら！とにかく、食べなさい。今日は奮発したのよ」

と、聖依子に紙皿を差し出す。

聖依子「ありがと」

と、食べ始める。

紗智「まったく、色気より食い気ね」

と、その時、英語の会話が聞こえてくる。

紗智、顔を上げると花見を見ている外国人観光客がいる。

紗智「あ、そうだ。ね、聖依子」

聖依子「何？」

紗智「来週、外国人のガイドボランティアに行くんだけどさ、一緒に来ない？」

聖依子、肉を頬張りながら

聖依子「がいどぼらんていあ？」

紗智「そ。前から誘おうと思ってたのよ。気分転換に。外国の人と話してみるのもいい経験になると思うのよね」

聖依子「私、英語話せないんだけど」

紗智「大丈夫よ。私も傍にいるし、簡単な英語なら、何言ってるか分かるでしょ？」

聖依子「そりゃ分かるとは思うけど……どうしよっかなあ。面接もあるかもしれないし」

紗智「どうせ落ちる面接行くより、よっぽど有意義だと思うわよ」

聖依子「ちよっと！落ちる前提で言わないでよ！もう！」

と、上を見上げて桜の花びらが散っている様子をじっと見つめる。

聖依子「私って必要ないのかな……」

○ 駅前広場（朝）

函館駅の建物がある。壁には『函館駅』の文字。

駅前の広場には日本人や外国人など多くの観光客が行きかう。

紗智と聖依子、腕にガイドボランテイアの腕章をつけ、立っている。

聖依子、『すぐにできる英会話』と書かれた本を見ている。

聖依子「（呟き）やば、全然分かんない」

と、楽し気な声が聞こえ、顔を上げる。

近くで同じ腕章をつけた女子高生や大学生達が外国人観光客と楽し気に会話をしている。

聖依子「あんなの絶対できない……ねえ、紗智、私やっぱり」

と、紗智のいた方向に顔を向ける。

そこには、誰もいない。

聖依子、慌てて周りを見回す。

紗智、離れた場所で外国人観光客と楽

しげに話をしている。

聖依子「ちよつと、1人にしないで」

外国人観光客女の声「(英語で、以下英と表記)
すみません、ちよつといいかしら？」

聖依子「へ？」

と、驚いたように振り向く。

後ろには、地図を広げている外国人の
カップル。

外国人観光客女「(英)この、箱館奉行所に行
きたいんだけど、どうやって行ったらいい
のかしら？ バス？ それとも路面電車の
方が早いかしら？」

聖依子「ぶ、ぶぎよしよ？」

外国人観光客男「(英)できれば、短時間で回
りたいんだ。どう行ったら一番効率がいい
かな？」

聖依子「え？ えーとつ、奉行所で？ バス？
バスで行きたいの？ えつとバス停は、え
つと、バスストップだから」

と、手に持っていた本を開き、慌てて

めくる。

それを見て、外国人観光客カップルが顔を見合わせる。

外国人観光客女「(英)ねえ、もしかして英語が分からないんじゃない？」

外国人観光客男「(英)でも、腕にガイドボランテアって書いてあるぜ？ 交通経路を調べてくれるんじゃないか？」

聖依子、さらに慌てている。

○函館駅・中（朝）

デイラン・オーウエル（34）、ベンチに座り、古い革製の表紙のノートを開いている。茶髪に緑の瞳。

と、顔を上げガラス越し、外にいる外国人カップルの側で、慌てている聖依子を見つける。

デイラン、聖依子の顔をじっと見る。

デイラン「……(英)あれは」

と、突然、立ち上がる。

○ 駅前広場（朝）

聖依子、本を捲り続ける。

外国人観光客カップル、困ったように

互いに顔を見合わせる。

外国人観光客女「（英）ごめんなさい。私達、

急いでるから他の人に聞くわ」

と、男性を促し立ち去ろうとする。

聖依子「あ、あの！ ちよつと」

デイランの声「（英）どうしました？」

聖依子「えっ？」

と、振り向く。

聖依子の横に、デイランがいる。

聖依子、目を見開き驚く。

デイラン、外国人カップルに何かを話

している。

聖依子、呆然とその様子を見る。

と、デイランが聖依子を見下ろす。

聖依子、少し慄く。

デイラン「僕が通訳するから、説明してあげ

て？ それなら、大丈夫だろ？」

聖依子「え、あ、あ、はい！」

デイラン「よし」

と、ニッコリ笑う。

デイラン、外国人観光客カップルに、再び英語で話しかけている。

聖依子、その様子を呆然と見つめる。

○函館駅・カフェ

駅の中にあるカフェ。

聖依子の声「本当に、ありがとうございます
た」

○同・カフェ・中

聖依子とデイラン、窓際の席で向い合
せに座る。

デイラン「いえいえ、どういたしまして」

聖依子「……あの、ところで」

デイラン「ああ、デイラン・オーウェルです。

君は？」

聖依子「え、あつ、私は高橋聖依子です」

デイラン「セイコ……いい名前だ」

と、じつと聖依子の瞳を見つめる。

聖依子、その視線に気まざくなり視線を逸らす。

聖依子「あの、何か？」

デイラン「ん？ いや、何でもないよ」

聖依子「あっ、あの。何かお礼したいんですけど。私、今働いてなくて、そんなにお金とか払えないんですけど」

デイラン「こんな事でお礼なんていいよ」

聖依子「いえ！ そういう訳には！ 私、英語さっぱりわからなかったので、本当に助かりましたし！」

デイラン「英語分からないのに、ガイドボランティアしてたの？」

聖依子「友達に連れてこられ」

デイラン「友達？」

聖依子「ええ……知らない間に行っちゃいましたけど」

デイラン「ふーん……ね、これから時間あ

る？」

聖依子「はい？ まあ、ありますけど」

デイラン「さっき、言ってたお礼。やっぱりしてもらおうかなっと思って」

と、意味ありげな笑み。

聖依子、デイランの顔をじっと見つめ、眉間に皺をよせ少し距離を取り、体を抱きしめる。

聖依子「あの、そういうお礼はちよっと」

デイラン「え？ ああ、違う違う！ ちよっと、手伝ってほしい事があるんだ」

聖依子「手伝ってほしい事？」

デイラン「そう、人探しをね」

聖依子「人探し？ ですか？」

デイラン「そう。でも僕じゃなくて、祖先の」

聖依子「祖先？」

デイラン「俺の祖先。ヒューゴって言うんだけど、江戸時代の終わりの頃に、函館のイギリス領事館に派遣されていた事があってね。これが、その時の事を書き残した記録

なんだ」

と、自分のカバンの中から古い革製の表紙のノートを出す。

デイラン、聖依子に表紙を見せる。

そこには万年筆で書かれた筆記体で

『E Z O H A K O D A T E』の消え
かかった文字。

聖依子「エゾ、ハコダテって書いてある」

デイラン「お、これは読めるんだ」

聖依子「これ位は、読めます」

デイラン、ノートを開いて見せる。

デイラン「ほら、ここ」

と、ページの一番上の分を指す。

デイラン「ヒューゴが『国の命令で日本の蝦

夷地、箱館の領事館に派遣された』って書

いてあるんだ……『私が日本の箱館に降り

立ったのは、23歳の頃だった』」

聖依子、ノートの文字を見つめる。

遠くから船の汽笛が聞こえてくる。

○幕末の津軽海峡・イギリス蒸気船

船の汽笛と荒波の音。

津軽海峡をイギリス国旗がはためく蒸気船が進む。

甲板に、函館山を眺めるヒューゴ・オ
ーウェル（23）が現れる。

ヒューゴの声「見知らぬ異国の地に不安しか抱いていなかったが、船上から見た海の上に浮かぶ美しい山と雲間からもれる光の幻想的な光景は、あのジブラルタルの光景を彷彿とさせた。その事が、いつしか俺の心を慰め、新天地での生活に期待を与えてくれた」

○函館駅・中・カフェ店内

デイランがノートを読んでいる。

デイラン「『この美しい港町で、私は、さっそく一生の友になりそうな人物に出会った』って書いてある。俺は、ここに出てくる友を探したいんだ」

聖依子「えっと、ちよつと待って。これって幕末の頃の話なんですよね？」

デイルン「ああ。だから、探したいのは、この友人の子孫か、親族になるかな」

聖依子「ちなみに、ご先祖様の友達が、どこ
の誰かわかってるんですよね？」

デイルン「奉行所で働いていた『ツノダタツ
ノスケ』っていう男の人だ。もう一人が商
家の娘で『シマコ』って女の人」

聖依子「え、2人も？ 他に情報は？」

デイルン「ないよ」

聖依子「……あの、とつても、残念なお話な
んですけど」

デイルン「ん？」

聖依子「たぶん、見つけるのは不可能だと思
います」

デイルン「やってみないと、わからないと思
うけど」

聖依子「いや、ぜったいに無理ですよ！」

デイルン「でも、名前はわかってる」

聖依子「400年以上前ですよ！　第一、子孫の人が、今、函館にいるかどうかもわからないし！　絶対に不可能ですって！」

ディラン「でも、どうしても、忘れ物を届けてあげたいんだ！」

聖依子「え、忘れ物？」

ディラン「ああ。ヒューゴは戦争で、箱館を離れるよう命令され、友人達と別れなきやいけなかった。後で必ず帰って再会しよう」と約束してね。でも、帰る事は一生できなかったらしい」

聖依子「……」

ディラン「晩年、その事をとて後悔していたそうだよ。最後に書かれてあるんだ。再会の約束を果たしたい。戻ったら渡したい「忘れ物」があったって。だから、彼はこのノートとその忘れ物を子孫に残したんだ。いつか、友人達の子孫に渡してくれる事を願ってね」

聖依子「そんな、無茶な」

デイラン「本当だよ。我が祖先ながら無茶苦茶だよね」

と、苦笑する。

デイラン「でも、俺はこのノートを見つけてしまった。忘れ物も一緒にね。中身を読んで、運命だと思った。無茶なお願いでも、祖先の願いは叶えてやりたいと思ったんだ。幸い、俺は旅行ライターだし……ねえ、聖依子」

聖依子「は、はい」

と、改めて背筋を伸ばす。

デイラン、急に立ち上がり、聖依子の目の前で土下座する。

聖依子「えっ、ちよつと！？」

デイラン「無茶なお願いをしたのは承知の上だ。さっきは、助けたお礼って言ったけど、むしろ、俺からの仕事だと思って、探すのを手伝ってくれないかな？ ちゃんと、チップも払うから！」

聖依子「えっ！？ いや、そういう事はプロ

に頼んだ方が！ てか、立って！」

デイルン「俺は、仕事の都合で、ずっと日本にはいられない。頼む！ この通り！ ジヤパニーズはこうやってお願いするんだろ！？」

聖依子「なんで、いきなり勘違いした外国人みたいになっちゃってんの！ ちょっと！ お願いだから頭上げて！ やる、やるから！」

デイルン、頭を上げる。

デイルン「本当？ センキュー！ 聖依子！」

と、立ち上がって聖依子をハグする。

聖依子、諦観した顔。

○「OTONASI」・外観（夜）

ライトアップされた看板。

高橋の声「で、お前受けちゃったの？」

○同・店内（夜）

ステージではアコースティックギター

のジャズ演奏中。

店内には数名の客。

バーカウンター内では頭を抱えている

聖依子、その向かいでは、お酒を片手に飲んでいる紗智が座る。

聖依子の横に立つ高橋、呆れた顔で見つめながらグラスを拭いている。

紗智「私がない間に何してんだか」

聖依子「先にいなくなったのは紗智じゃない！」

高橋「なあ、変な奴だったらどうするんだよ」

紗智「身元は、はっきりした人物みたいですよ。イギリスじゃ有名な大手出版社のホームページに写真もあったし」

と、スマホのホームページを見せる。

スマホ画面には、デイランの写真。

高橋、スマホ画面を見る。

高橋「顔はいいな。だからって、安請け合いするなよ。無茶だろ、いるかどうかも分からない子孫を探すなんて」

聖依子「私もそう思うけど、なんか、ゴリ押しされて」

紗智「聖依子って、流されやすいわよね」

聖依子「そもそも！ 紗智がボランテアに連れてったから、こんな事になったんじゃない！」

紗智「普通、ボランテアで、こんな厄介な事、頼まれる方が奇跡だから」

高橋「で？ その、デイルンって外国人はどうしたんだよ」

聖依子「なんか、ちょうど今日、イギリスに帰る所だったんだって。次、来るのが、夏頃になるだろうから。とりあえず連絡先と、このノート渡された。できる範囲で調べてくれないかって」

と、下に置いているカバンからヒューゴのノートを取り出す。

高橋「そりやまた、人任せだな」

紗智「ね、見せて」

と、聖依子からノートを受け取り開く。

紗智「うわっ、すごい……少し古い文体で書

かれてるわね。聖依子、これ読めるの？」

聖依子「読めるわけないじゃない」

紗智「読めないのに何で預かったの？」

聖依子「日本人が読んだら何かわかる事があるかもしれないからって。だから、その」

と、紗智をじっと見つめる。

紗智「うわ、嫌な予感」

聖依子「お願い。これ訳してもらえない？」

紗智「そうじゃないかと思ったわよ。でも、

私でもこれは難しいし……ま、誰かに頼ん

でみるわ。でも、本当に探すつもり？」

聖依子「うん、できる限りでいいっていうし

分かんなくても、お金払ってくれるって言

うし。ちよっとしたバイト感覚でいいかな

って思ってる」

と、苦笑い。

紗智「……あんたって、詐欺に真っ先にひっ

かかりそうなタイプよね」

聖依子「ちよ、ひどい！」

高橋「まあ、引き受けちゃったもんは仕方がないわな。聖依子、深入りしない程度にやれよ。それに、就活もしろ。危ないと思ったらすぐに相談」

聖依子「はあい」

ギターの演奏が終わる。

客の拍手。

客が、カウンターにやってくる。

客「柗二さん！ そろそろ、ピアノも聞きたいなあ」

高橋「了解！ 今、行くわ！ あと頼む」

聖依子「うん」

柗二がカウンターから出て、ステージに向かう。

客からの拍手とヤジの中、高橋のピアノ演奏が始まる。

聖依子、食器を洗い始める。

と、店の引き戸が開くベルの音。

聖依子「いらしゃいまっ」

と、入口を見て固まる。

入口には林田寛人（42）、店内を見回し、聖依子の視線に気が付く。

聖依子「ひろ、君？」

林田、嬉しそうに笑う。

林田「聖依子ちゃん？ 久しぶりだな！ 元気だった？ いやあ、美人さんになったな」

と、カウンターに近づく。

聖依子、戸惑うように林田を見る。

林田「懐かしいなあ。最後に会ったのって高校に入る前だっけ？」

聖依子「えっ？ なんで、東京でバリスタやってたんじゃないの？」

林田「ああ、そうなんだけど。柗二から聞いてない？」

聖依子「え、何を？」

林田「俺、函館に帰ってきたんだよ」

聖依子「え！？」

林田「だけど、なかなか働けるとこ見つからなくってさ。したら、柗二がこの店で暫く働けて言ってくれたんだよ」

聖依子「うそ」

と、口をポカンと開けて驚く。

林田、それに気づかず話し続ける。

店内では、高橋のピアノのジャズ演奏が盛り上がりを見せる。

○（回想）住宅街（夕方）

玄関前に短冊の付いた笹が飾り付けられた家々。

子供達が、ビニール袋や大きなバッグを持って歩いている。

○（回想）住宅・玄関前（夕方）

笹が飾られた開いた玄関の前、浴衣を着て大きなビニール袋を抱えた高橋聖依子（6）と、手をつないでいる林田寛人（18）。

聖依子・林田「（歌）たけーに、短冊七夕祭り！

おおいやいやよ！ ろーそくいっぼんちよ

ーだいな！」

家の中から奥さんが現れる。

奥さん「ずいぶん大きな声だと思ったら、寛人君じゃない！ あら！ 聖依子ちゃん！ いらっしやい、はい、お菓子」

と、うまい棒を渡される。

聖依子「ありがとうございます！」

奥さん「今日は寛人君と？ お兄ちゃんは？」

聖依子「お兄ちゃんは、今日デート。だから、

聖依子も、ひろ君とデートしてあげてるの！」

と、嬉しそうに林田を見上げ笑う

奥さん、可笑しそうに寛人を見る。

奥さん「あらま！ 寛人君、お嫁さん候補がいてよかったわねえ」

林田「はははは、お陰様で」

と、にかつと笑う。

○元の「OTONASSI」外（夕方）

引き戸が全て開けられオープンカフェの状態。

短冊が付いた笹が飾られている。

聖依子、椅子に座りそれを見つめる。

側では子供達が歌っている。

子供達の声「たけーに短冊たーなばーたまー
つり、おおいにいわおう！　ろーそくい
っぼんちよーだーいな！」

歌い終わっても聖依子、ぼんやりして
いて気が付かない。

紗智の声「聖依子！　歌い終わってるわよ！」

聖依子「ひっ！」

聖依子が顔を上げると、横で紗智が仁
王立ちしている。

紗智「ほら、待ってるんだから、早く渡して」

聖依子「え？」

と、子供達の方を見る。

子供達、困り顔でこちらを見ている。

聖依子「ああ！　ごめんごめん！　はい」

と、傍に置いた段ボールから、お菓子
を取りだし慌てて配り始める。

×

×

×

お菓子が入った段ボールに、『歌を歌ってから取ってね』という殴り書きの張り紙。

聖依子と紗智、店内のバーカウンターに座っている。

紗智「また、ひろ君の事考えてたの？」

聖依子、目を逸らす。

紗智「凶星かい。で、そのひろ君と終二さんは？」

聖依子「買い出しに行ってる。どうせ、今日8時まで子供が来るし。七夕終わってから店開けるってさ」

紗智「聖依子はお留守番ってわけ。しっかし、驚いたわよ。あんたが昔話してた、ひろ君。

なんか、想像と違ってた」

聖依子「は？　どんな想像してたのよ」

紗智「だって、聖依子『かっこいい』って言うってたから。あんたが好きな芸能人とか前の彼氏とか綺麗系だったし？　てっきりそんな感じの想像してたのよね。でも、ひろ

君って明らかに、綺麗系ではないでしょ。
良く言ってる、イケメンなゴリラ顔？ 顔で
かいし声でかいし」

聖依子「イケメンゴリラって。人の憧れの人
を言いたい放題」

紗智「ま、いいお父さんにはなりそうな感じ
よね。今まで結婚してないのが不思議。も
う、子供の1人や2人いそうだもん。ね、
ひろ君って結婚してないの？」

聖依子「してないみたい」

紗智「へえ、じゃあ悪くはないんじゃない？」

聖依子「何が？」

紗智「新たな彼氏？ むしろ、旦那候補？」

聖依子「はあ！？ 何言ってるの！」

紗智「だって、気が付いたらひろ君の事ばっ
かり考えてんでしょ？ 初恋の人なんだし。

夢あるじゃん」

聖依子「で、でも！ ひろ君と私じゃ歳離れ
すぎだし」

紗智「今時、12歳差なんて大した事ないわ

よ。忘れてない？ 私達もう30歳よ！
年齢だけで売れる時間は終わったの！」

聖依子「売れる時間って……自分でもよく分
かんないのよ。好きなのかどうか」

紗智「三十路女が何言ってるのよ。おぼこで
もあるまいに」

聖依子「……ん？ そう言えば、紗智、何し
に来たの？ 約束してたっけ？」

紗智「あ、そうよ！ ノートの翻訳、半分で
きたから、とりあえず持ってきてあげたの
よ！」

聖依子「ノート？」

紗智「何忘れてんのよ！ あんたが、イケメ
ン外国人ライターから、人探しするのに渡
されたノートよ！」

と、カウンターにヒューゴのノートと、
クリップで纏められたA4の翻訳の紙
束が置かれる。

聖依子「あっ」

紗智「聖依子が頼まれたことでしょうが！」

聖依子「ごめんごめん。デイランからもしばらく連絡来てなかったから、つい」

紗智「え、そうなの？ その外人いつ来るって？」

聖依子「たしか来月？ 一か月前は、中東に
いるって言ってたから、帰国したらすぐに。

港祭りの頃に来るつもりだって」

紗智「来月か。まあ、それまでには、翻訳が
終わると思うけど」

聖依子「なんか、ごめん。仕事もあるのに」

紗智「なんも、いいけどさ。大学時代の先生
に見てもらってて時間かかっただけだし。

喜んでたから結果オーライよ」

聖依子「そう言って頂けると、助かります。
今度、奢る」

紗智「就活してる人が何言ってるの。でも、
お酒の一杯位は奢らせてあげる」

聖依子「はっ、了解であります」
と、敬礼の真似。

聖依子と紗智、互いに笑いあう。

○同・聖依子の部屋（夜）

階下からピアノとサックスのジャズ演奏、客達の声が聞こえる。

間接照明だけの部屋。

聖依子、ベッドに横になりながら、ノートを側において、翻訳を読む。

聖依子「1865年10月」

○幕末の箱館・イギリス領事館・外観

木造2階建ての大きな日本家屋。

門にはイギリス国旗。

門前に馬車が止まる。

馬車から、スーツ姿のヒューゴが降り立つ。荷物を持ち、坂を見下ろして函館の街並みを見渡す。

ヒューゴの声「ちょうど箱館は秋の頃だ。少し前に、領事館が火事になったため、俺が赴任した時には、仮の領事館に移動していた。箱館は美しい土地だ。坂の下に広がる街並み、何より美しい曲線を描く港は世界

まれに見るほどすばらしい」

馬車からロイ・キャンベル（27）が
下りてくる。

ロイ「（英）おい、ヒューゴ。ぼーつとしてな
いで中に入るぞ」

ヒューゴ「（英）ああ」

と、名残惜しそうに景色を眺めてから
ロイに続いて中に入る。

○同・イギリス領事館・玄関・中

広い玄関土間。

ロイが先に中に入り立ち止まる。
後ろにつかえるヒューゴ。

ヒューゴ「（英）おい、どうしたんだ」

と、ロイが見ている方向を見る。

玄関に、和服を着た小柄な若い日本人
女性が背を向けている。

と、女性、人の気配に気が付き後ろを
振り向く。手に風呂敷包みを抱えた鳴
無志摩子（16）。

ヒューゴ、志摩子に見惚れる。

ロイ、志摩子に近づく。

ロイ「(英)お嬢ちゃん？　迷子かい？　ここは、イギリス領事館だから勝手に入ったらいけないよ」

志摩子、近づいたロイを戸惑ったように見る。

ヒューゴ、はっと我に返り

ヒューゴ「(英)ロイ、日本人の子供に、英語で話してもわからないだろ」

ロイ「(英)ああ、そうか。じゃあ、日本語話せる奴、連れてこないと」

志摩子の声「(英)子供ではありません」

ヒューゴとロイ、驚いて志摩子を見る。

志摩子、少し怒ったように目を吊り上げている。

ヒューゴ「(英)君、英語話せるの？」

志摩子「(英)少しなら。私は、もう成人しています。お嬢ちゃんなんて失礼です。イギリスは紳士の国って聞いてたけど違うんで

すね」

ロイ「(英) なっ、日本人のガキがっ！」

と、掴み掛ろうとする。

ヒューゴ「(英) ロイ！」

ロイ「(英) だってよ。この日本人」

ヒューゴ「(英) ここで、暴力を振るったら、

彼女の言う通りだぞ」

ロイ「(英) だけど、我々を侮辱したんだぞ！」

ワイスの声「(英) おお、志摩子！」

と、ヒューゴ、ロイ、志摩子が声の方
を振り向く。

ハワード・ワイス(43)と数名の館

員が歩いてくる。

ワイス、志摩子の目の前にやってくる。

ワイス「(英) 遅くなっちゃったね。注文し

た物を持ってきてくれたのか？」

志摩子、笑顔になりお辞儀する。

志摩子「(英) ワイス様。こちらこそ遅くなり

まして申し訳ございません。父から預かっ

て参りました」

と、手に持っていた風呂敷を渡す。

ワイス「(英) おお、ありがとう！ やっぱり、

鳴海屋に頼むのが一番だな」

と、戸惑ったまま硬直しているヒュー

ゴとロイに気が付く。

ワイス「(英) ロイ?! 来てたのか!」

ロイ「(英) ワイス領事お久しぶりです」

ワイス「(英) おお、久しぶりだな。で、お前
がオーウエルだな」

ヒューゴ「(英) はい。ヒューゴ・オーウエル
と申します。宜しくお願い致します。で、

あの、領事。そちらのレディは」

ワイス「(英) ああ、お前達にも紹介しよう。

こちらは、志摩子だ。鳴海屋という奉行所
公認の商家の娘さんだ。今後、会う事もあ
るだろう。しかし、先ほど怒鳴る声が聞こ
えたが、何か」

ロイ「(英) いや、実はこの娘が」

ヒューゴ「(英で遮って) 日本人にしては、流
暢に英語を話すので、驚いたんですよ」

と、ロイの口を手で塞いで話す。

志摩子、驚いてヒューゴを見る。

ワイス「(英)はっはっは、そうだろ。我々も初めて会った時は驚いたよ。さあ、志摩子。

自己紹介してくれ」

と、ワイスに背中を押されて、志摩子がヒューゴ達の方を向く。

志摩子「(英)ご紹介いただきました、鳴海屋の志摩子でございます。ご入用の時は、ぜひご最下さいませ」

と、優雅にお辞儀して笑顔を見せる。

暴れるロイの口を手で塞いだまま、ヒューゴ、志摩子の笑顔に見惚れる。

ヒューゴの声「志摩子は、私が初めて見た日本人の女性であった」

○ 函館中央図書館・外観

壁に函館中央図書館の表札。

○ 同・2階レファレンス室

古い書籍が並ぶ書棚。

聖依子と紗智、窓際の机にいろんな書籍を積み上げ、横並びでそれぞれ本を覗き込む。

紗智「確かに鳴海屋って店はあったみたいね。

この古い地図の感じだと、あんたの家の近くっぽいけど」

聖依子「え、うそ」

紗智、聖依子に本を見せる。

聖依子、本を見て首を傾げる。

聖依子「んー……これだけじゃ分かんないわ」

紗智「よね。志摩子についての資料も一切ないし。そっちは？」

聖依子「特に目ぼしいものは。イギリス領事館に関する本にも、ヒューゴの名前は見当たらない」

紗智「まあ、館員全員の名前なんてここにある本じゃ判るわけないか」

聖依子「だよね……ほんと、どうしょ」

紗智「ねえ、志摩子さんについて他になんか

書いてあったの？」

聖依子「ん？ ああ、たしか」

と、横に置いてあった翻訳の束を捲る。

○幕末の箱館・鳴海屋・外観（朝）

外国船や商船など様々な船が停まっている波止場。

外国人や函館の人々が働いている。

ほど近く、大きな屋敷がある。

はためく暖簾には鳴海屋の文字。

ヒューゴの声「俺と志摩子が再会したのは、

翌日だった」

○同・鳴海屋・中（朝）

奉公人達が忙しなく働いている。

笑顔の鳴無庄左衛門（43）と仏頂面

の志摩子が座って向かい合っている。

傍では、土間に立っているヒューゴ。

鳴無「頼むよ、志摩子」

志摩子「なんで、私が」

鳴無「だからよ。ワイズ領事から頼まれちゃまったんだよ。新人に街を案内してやってくれって」

志摩子「これから、奉行所の方に出かけなきゃ行けないですよ」

鳴無「ついでに奉行所も案内してやればいいじゃねえか。ご鼻唄さんだからさ。な？お前の言っていた本、今度見繕ってやるからよ」

志摩子、大きなため息。

志摩子「分かりました」

と、いきなり立ち上がってヒューゴの目の前で顔を見上げる。

ヒューゴ、驚いて目を見開く。

志摩子「(英)準備をしまするので、少しお待ちいただけますか？ ミスター」

ヒューゴ「(英)あ、ああ。もちろん」

○同・街中・大通り(朝)

店先で準備する人や遊ぶ子供達、楽し

げに話す外国人が歩いていてる。

ヒューゴと志摩子、並んで歩く。

ヒューゴ、珍しそうに周りを見回している。

ヒューゴ「(英) すごい人だな」

志摩子、むすつと前を向いたまま

志摩子「(英) 昔の箱館は小さな漁村だったんですよ。ですが、黒船が来て開港してからどんどん人が増えて。まあ、我が家もそれで箱館に来た商品の一人ですが」

ヒューゴ「(英) なるほど。そういえば鳴海屋は何の商売をしてるんだい？」

志摩子「(英) 品物は何でも取り扱っています。外国から入ってきた物を領事館から買い取って日本の商人たちに卸し、日本の品物を外国の商人や領事館に売っています」

ヒューゴ「(英) へえ。この商人は皆、志摩子みたいに英語が話せるのかい？」

志摩子「(英) いいえ、殆どの商人は奉行所から派遣された通詞の方がついています」

ヒューゴ「(英)なら、志摩子はどこで英語を？」

志摩子「(英)幼い頃に、アメリカ領事館のライス様に教えて頂きました。でも、考えながら話しているので、まだまだです」

ヒューゴ、志摩子をじっと見て

ヒューゴ「なら、こうやって日本語で話した方がシマコは楽ですか？」

志摩子、立ち止まり目を見開いてヒューゴを凝視する。

志摩子「あ、あなた、日本語、話せるの!？」

ヒューゴ「はい。以前、二ホンに来てた人に教わりました……ボクの言てる事わかりますか？」

志摩子、ぼかんと口を開けて啞然する。

やがて、破顔して笑い始める

志摩子「ええ、分かるわ。でも、なんか変つ」と、手で口を押えて笑う。

ヒューゴ、微笑ましそうに志摩子を見つめ、やがて同じように笑い始める。

ヒューゴの声「志摩子は、それから心を開いてくれたようで、俺に日本語や箱館の事を何でも教えてくれるようになった」

○「OTONASI」・店内（夜）

客の拍手の中、ステージでは高橋がピアノを弾いている。

聖依子、カウンターに座り、翻訳を眺めている。

ヒューゴの声「後から分かった事だが、志摩子は箱館にいる外国人の間で有名な女性だった。彼女は、実に賢く寛容で仕事でも私生活でも、俺にとって欠かせない女性になっていった。そう、気が付いたらいつも志摩子の事を考えるほど、とても大切な存在に」

聖依子「気が付いたらいつも考えるほど……」

と、林田が突然顔を近づけてくる。

林田「なあにずっと読んでるの？」

聖依子「!？」

と、驚いて、林田を見る。

林田、顔が赤くなり酔っぱらって、顔がにやけている。

聖依子「ひろ君、酔ってる？ 一応、仕事でしよ」

林田「お客さんに勧められちゃってき。大丈夫大丈夫。で、何読んでるの？」

と、聖依子に寄り添って座ってくる。
聖依子、動揺する。

聖依子「こ、この前、話したでしょ？ 人探しの話。これノートを翻訳したやつ」

林田「ああ、あれね。どう？ できそうなの？」

聖依子「どうかな…：難しいかも」

林田「ふーん、そっか」

と、聖依子を笑顔でじっと見つめる。

聖依子「あの？ ひろ君、大丈夫？」

林田「聖依子ちゃん」

聖依子「ん？」

林田「甘えても、いい？」

聖依子「…：はい？」

林田、徐に聖依子に抱きつく。

聖依子「な、何！？」

林田が顔を寄せ、聖依子のこめかみに突然、キス。

聖依子、硬直する。

林田、体を離してにっこりと笑い、がくんと聖依子の肩に頭をもたれる。

聖依子「ひ、ひろ君？」

と、林田から寝息が聞こえてくる。

聖依子、林田の口元が首筋に辺り顔を赤くする。

ピアノの演奏をしていた高橋、その様子に気が付いてピアノを乱暴に引き、酷い音が鳴る。

高橋「寛人！ お前何やってんだよ！」

と、ステージから慌て降りてくる。

常連客1の声「おうおう！ 寛人さんやるね

え」

常連客2の声「お兄ちゃんどうする？」

聖依子、顔をさらに赤くする。

○波止場（夜）

海上の夜空に花火が上がる。

観客が歓声を上げている中で、ディラン、カメラを片手に花火を見る。

聖依子、隣にいる。

ディラン「ワオ！ たーまやー！」

聖依子「……」

と、とディランを呆れたように見る。

と、聖依子、暗がりに紛れて彼女を後ろから抱きしめ、髪にキスをしている男性をディランの先に見つける。

聖依子、その様子をじっと見つめ、こめかみを抑え、頬を赤くして俯く。
ディラン、ちらりと聖依子を見る。

○「OTONASI」・店内（夜）

花火大会帰りの客で賑わっている。

林田と高橋、忙しそうにカウンターで接客。

聖依子、テーブル席に座り、林田を気

にしている。

向かいの席に座るデイラン、ウイスキーを飲みほす。

デイラン「いやあ、やっぱり函館はいいね！
日本的でもあるが、どこかヨーロッパ的なところもある。今日の花火もファンタステックだった。ね、聖依子」

聖依子「……」

デイラン「聖依子？」

と、聖依子を見て、視線を追って女性と話している林田の方を見る。

デイラン「誰？」

聖依子、はっとデイランの方を見る。

聖依子「え？」

デイラン「あの男の人、誰？」

聖依子「え、べ、別にひろ君の事、見てたわけじゃ！」

デイラン「彼、ひろ君っていうのか……聖依子のボーイフレンド？」

聖依子「は！？　ち、違います！」

デイルン「リアリー？」

聖依子「本当だってば！ あ、ノート！ ヒ

ューゴのノートの事ですけど！」

デイルン「ああ、ごめんね。まかせつきりに
しちやって」

聖依子「あの、ごめんなさい。実は、報告で
きるような事がなくて」

デイルン「そうか。まあ、仕方ないよね」

聖依子「分かったのは、ノートに書いてあつ
た鳴海屋が、この近くに実際にあつた店だ
つたって事だけかな。志摩子さんについて
はまだなにも」

デイルン「謝らなくていいよ。もともと直ぐ
に見つかるとは思ってなかったしね。俺の
方でも実家で手掛かりになりそうなもの、
改めて探してみたんだけど、見つからなく
て」

聖依子「そっか」

デイルン「だけど、前にノートと一緒に写真
も出てきた事を思い出したんだ」

聖依子「写真？」

デイラン「そう。今は手元にはないけど、見たことを思い出して」

と、じっと聖依子を見つめる。

デイラン「(英) ……やっぱり」

聖依子「え？」

と、店に紗智が入ってくる。

紗智「おまたせ！ あ、あなたがデイランさん？」

と、デイランと聖依子の横に座る。

デイラン「デイランでいいよ。君は？」

聖依子「大熊紗智。私の友達で、英語に詳しくから日記の翻訳を頼んだの」

デイラン「おお、そうなのか！ (英) ありがとう、君にもチップを払わないとね」

紗智「(英) あら、なら聖依子の2倍は出してくださいね。彼女以上に働いてますから」

デイラン「(英) そうなのかい？ なら、サービスもしたほうがいいかな」

と、ウインクする。

紗智、肩を竦める。

紗智「(英) お断りします。あ、聖依子にも、
適当に手をだしたら怒りますからね」

デイラン「(英) ふーん、適当じゃなかったら、
いいのかな？」

紗智「(英) あら、本気なの？」

と、紗智とデイランが互いに笑いあう。

聖依子、そんな二人を交互に見る。

聖依子「ねえ、英語で、何話てるの？」

紗智「私は聖依子以上に働いてるから、お給
料を2倍くださいってお願いしたの」

デイラン「君の友達はしつかり者だね」

聖依子「いや、守銭奴なだけでしょ」

紗智「そういう事言う子には、もう、手伝っ
てあげないわよ」

聖依子「え、ごめんなさい！ 何飲む？ い
つものでいいかな？」

デイラン「ハハハ、仲良いんだな」

と、そこに高橋がお酒を持ってやって
くる。

高橋「ずいぶん楽しそうだな。はい、お待たせ。紗智ちゃんはいつものでいい？」

紗智「はい、お願いします。聖依子の驕りで」

聖依子「ちよっと！」

デイルン、立ち上がる。

デイルン「マスター。聖依子のお兄さんなんですよね。俺は、デイルン・オーウエルです。妹さんにお世話になってます」

と、握手を求める。

高橋、戸惑いながらも手を握り返し

高橋「お、おお。日本語上手すぎるな、おい。

あんまり、妹に無理させないでくださいよ」

デイルン「はい、わかっています。お兄さん」

高橋「お、おにいさん？」

林田の声「おーい！ 柊二！」

と、林田がやってくる

林田「お客さんから、ピアノのリクエスト入ったぞ。お任せだって」

高橋「またかよ。じゃあ、ゆっくりしてって」

と、ピアノの方へ、向かっていく。

聖依子、林田をチラチラと見ている。

林田、その視線に気が付いて苦笑い。

林田「あーこの間は、その」

聖依子「あ、なんも！ 気にしてないから！」

林田「いや、この頃、酔いが回るの、なまら早くってさ。あの後、終二に怒られちゃったよ。ほんと、ごめん」

聖依子「なんもなんも！ 大丈夫だったし！」

と、ちよつと頬を染めて笑う。

林田、その顔を見てほつとしたように笑う。

ディラン、林田をじつと見る。

林田、視線に気が付く。

林田「えつと、こちらは？」

聖依子「あ、紹介するね。名前はっ」

ディラン「(遮って)ディランと申します。聖

依子とはパートナーな関係です」

紗智、飲んでいたお酒を吹き出しそうになる。

林田「パートナー？」

デイラン 「はい……ビジネスの」

林田 「お、おお。そうなんだ。俺は、林田です。ここで、バリスタの仕事をしています。じゃあ、お客さんも待ってるから。ごゆっくり」

と、その場を離れカウンターに向かう。
聖依子とデイラン、林田の後ろ姿をじつと見る。

紗智、その様子を、笑いを堪えながら見ている。

高橋のピアノジャズ演奏が始まり、客からの拍手が鳴る。

○幕末の箱館・五稜郭・一の橋

橋を渡るヒューゴと志摩子。

ヒューゴ、五稜郭の堀に見入る。

○同・五稜郭・門番所

志摩子、門番と話している。

少し離れた所にヒューゴ、周りを興味

深く見ている。

志摩子、門番にお辞儀をし、ヒューゴの側に来る。

志摩子「ここで、待つようにとの事です」

ヒューゴ「奉行所入れないですか？」

志摩子、気まずそうに目を伏せる。

ヒューゴ「ああ、ボクいるからですか？ 申

し訳ない」

志摩子「いえ、気にしないで。今、顔見知りの方がいらっしゃるから、少し待てば」

角田の声「（大声）志摩子殿！」

志摩子「え？」

と、振り返ると、角田辰之助（23）が焦った顔で走ってくる。

志摩子「ああ、角田様。わざわざ申し訳ない事です」

角田「志摩子殿！ 下がっていきなさい！」

と、志摩子とヒューゴの間に入り、腰の刀に手を添えて構え、ヒューゴを睨み上げる。

志摩子、呆然と瞬きをする。

ヒューゴ、戸惑ったように角田を見つめる。

角田「志摩子殿が、エゲレス人と一緒に来た
と聞いたが貴様か！ 志摩子殿！ 何かさ
れたのですか！ まさか、乱暴されたと
か！ おのれ、野蛮人め！」

志摩子「え？ 違いますよ！」

ヒューゴ「ヤバンジン？ シマコ、ヤバンジ
ンとは何ですか？」

角田「志摩子だとお？ 馴れ馴れしい！ お
前の事だ！ 大人しくお縄につけ！」

志摩子「角田様！」

と、ヒューゴを庇う様に角田の前に出
る。

角田「志摩子殿！ 情けは無用です！」

志摩子「落ち着いてください！ こちらは、
新しくエゲレス領事館に赴任されてきたヒ
ューゴ様で、鳴海屋の大切なお客様なので
す。切られては困ります！」

角田「は？ エゲレス領事館？」

と、ヒューゴの顔を見る。

ヒューゴ「ボクはヒューゴ・オーウエルと申します」

と、優雅にお辞儀をする。

茫然とヒューゴを見つめる角田、静かに刀から手を離して姿勢を正す。

角田「(咳払い)早とちりをしたようだ。失礼致した。私は角田辰之助と申す。奉行所の蔵方で働いている」

と、同じようにお辞儀をする。

角田「して。志摩子殿、今日は何故、オーウエル殿と一緒に？」

志摩子「父がワイス領事から頼まれて、街を案内していたのですが、私もこちらに御用聞きに来る予定がありましたので、一緒に来たのです。ご迷惑をおかけして申し訳ありません」

角田「いやいや。気にすることはない。オーウエル殿、箱館はいかがだ？」

ヒューゴ「ヒューゴと呼んでください。ハコダテは、とても良い街です」

角田「そうか。私も江戸から来たが、この街をととても気に入っている。気候もいいし、人も穏やかだ。これから会う事もござろう。

以後、宜しくお頼み申す」

ヒューゴ「はい、ヨロシクお願いします」

と、右手を差し出す。

角田、一瞬戸惑うように見つめるが、思い出したように右手を差し出し、恐る恐る握って握手する。

ヒューゴの声「辰之助は、私にとって日本で初めてのサムライの友人になってくれた。実に日本人らしく、武士らしい、まっすぐな男だった」

○走る紗智の車・中

運転席で紗智が運転している。

聖依子、助手席でスマホを握りしめて画面を凝視。

画面には、林田のLINEのトーク入
力画面が開いている。

聖依子、打ったり消したりを繰り返して
いる。

聖依子「(呟き)今度、ごはんに行きませんか
…いやいや、今度ランチ一緒に行きませ
んか…いやいやいや」

紗智「いやいやいやいや、煩いわよ聖依子！」

聖依子「だって、なんて書いたら不自然じゃ
ないか、わかんなくて」

紗智「直接言えば言いじゃない。每晚お店で
会ってるんだから」

聖依子「お店には、お兄ちゃんいるから無理。

直接誘うなんて、私にはレベルが高すぎる。

ね、どうしたらいい？」

紗智「素直に書けばいいでしょ！ それより

も、もう着いたわよ！」

聖依子「へ？」

と、聖依子が顔を上げる。

○五稜郭・駐車場

紗智の車、駐車場に停車している。

紗智、車から降りてドアから中を覗き込み。

紗智「早く行くわよ。せつかく、私が有力な手がかり教えてくれそうな人に、会わせてあげるんだから」

聖依子、慌てて車から降りる。

聖依子「前から思ってたけど。紗智って、妙に人脈広いよね」

紗智「人望厚い友人を持って感謝することね。

今から会う人は、元々、博物館で働いてた人で、大学時代の講師だったんだけど。奉行所の歴史について研究してる人でね。この話したら、いろいろ調べてくれたのよ」

聖依子「そうなんだ。なんか、大事になってきたな」

紗智「ま、これ位しないと見つからないって事でしょ。ほれ、行くよ」

と、先に行ってしまう。

聖依子「あ！ 待ってよ！」

と、慌てて追いかける。

○同・箱館奉行所・外観

T…箱館奉行所

○同・事務所内

事務所のソファ―に聖依子と紗智が座っている。

と、田村久仁彦（40）が沢山の資料を抱えて入ってくる。

田村「ごめんね！ 待たせちゃって」

紗智、立ち上がり、聖依子も慌てて立ち上がる。

紗智「田村先生。今回はご無理を聞いていただき、ありがとうございます」

田村「いやいや、こちらこそ感謝してるよ。」

ああ、座って座って」

と、田村が資料をテーブルに置いてから座る。

聖依子と紗智も座る。

田村「君が高橋さんだね。初めまして」

聖依子「初めまして。今回は、ご協力頂きましてありがとうございます」

田村「いやいや、こちらこそ、大熊君からノートを見せてもらったけど、面白い資料だったよ。ぜひ、博物館に寄贈してほしい位だ」

聖依子「はあ。あの、紗智から、お話は聞いてると思いますが、何か分かりましたでしょうか？」

田村「うん。志摩子については残念ながらわからなかったんだけど、角田についてはわかったんだよ」

聖依子・紗智「（同時に）本当ですか!？」

田村「実は、この奉行所を再建してオープンする時にね、奉行所で働いていた人達の子孫を調べて連絡をして招待した事があるんだよ。で、その中に、角田家の名前もあつたんだ」

と、田村が住所録の一覧を差し出す。

住所録の欄に、「角田辰之助」の後に角

田家と東京の住所が書かれている。

田村「正確には、辰之助の弟の子孫にあたる人達なただけだね」

聖依子「弟？　ですか？」

田村「そう、辰之助は長男だったようなんだけど、どうにも家を継がなかったらしいな。まあ、詳しい事は、この人達に聞いてみた方が良いと思うよ。よかったら連絡を取ってみるかい？」

聖依子「いいんですか？」

田村「もちろん」

紗智「田村先生、さすがです！」

田村「いやいや、僕も久しぶりにワクワクして楽しかったよ。しっかし、あのノートは凄いな。まさか、遺骨窃盗事件について、あんな裏話があったなんてね」

聖依子「遺骨、窃盗事件？」

田村「あれ？　まだ、そこまで読んでない？」

紗智「あ、まだ聖依子には、そこまで渡してないかも」

田村「そうか。なら、その前に本とかで概要を知っておくといいよ。あの事件は、奉行所にとって、ある意味、外国と対等に渡り合った一番の成果とっていい事件だからね」

聖依子「はあ……」

○幕末の箱館・鳴海屋・前

急いで大通りを歩いてくるヒューゴが、鳴海屋に入っていく。

ヒューゴの声「穏やかな箱館の日々に、変化が起きたのは、10月も終わる頃だった」

○同・鳴海屋・応接室

椅子とテーブルが置かれた和室。

角田、深刻そうな顔をして座っている。志摩子、不安そうに傍に立っている。と、そこにヒューゴがやって来る。

ヒューゴ「申し訳ない。遅くなりました」

志摩子「ヒューゴ様」

と、不安げな顔。

ヒューゴ「シマコ？ 辰之助、どうした？ 何

かありましたか？」

角田、ゆっくりとヒューゴを見る。

角田「先程、奉行所に落部村の平次郎と近くに住むアイヌの人達が訴えにきてね」

ヒューゴ「アイヌ？ ああ、この土地の先住民ですね。で、彼らが何を訴えに？」

角田、顔を俯かせる。

角田「三日程前の晩、4人のエゲレス人が落部村を訪れたそう。そして、近くにあったアイヌの墓を荒らしていった」

ヒューゴ「墓を……あらした？」

角田「そう。埋葬されていた13人の骨を盗んでいったそう」

ヒューゴ「そんな（英）まさか、墓荒らし？」

角田「今頃、奉行がワイス領事に事情を聞きに行っているはずだ。ヒューゴ。お前、ま

さか関わっちゃいないだろうな」

ヒューゴ「ボクは、何も知りません！ でも、

3日ほど前ですか」

角田「何か知ってるのか？」

ヒューゴ、暫く考え込む。

ヒューゴ「……もしかしたら、ボクはそれを

見たかもしれない」

志摩子「えっ？」

ヒューゴ、志摩子を見て頷く。

○（回想）同・イギリス領事館・事務室（夕）

ヒューゴ、事務室の蝋燭をつける。

ヒューゴの声「ちょうど、3日前の夕方だっ

たと思います」

ヒューゴ、ふと窓の外を見る。

窓の外で、ワイスと数名の館員が話を

しており、傍には筵に包まれた大きな

荷物。

ヒューゴ、眉を顰める。

ヒューゴの声「話し声が聞こえて外を見てみ

ると、領事達がなにか話してて、傍には藁みたいな布に覆われた大きなものが見えました。それに」

ヒューゴ、顔をゆがませ、鼻を押さえ
る。

○元の幕末の箱館・鳴海屋・応接室

ヒューゴ、顔をゆがませる。

ヒューゴ「あの時、何か腐ったような妙な臭いがしたです」

角田「おそらく、お前が見たのが盗まれた遺骨だな。で、その後どうなったんだ？」

ヒューゴ「わかりません。すぐに、仕事に戻ったので。でも、確かめるべきでした」

と、悔しそうにテーブルを拳で叩く。

志摩子「……」

角田「ヒューゴ。もう一度聞く、お前は何も関わってないんだな」

ヒューゴ「神に誓ってないです。ただ、まずは自分で確かめたい。(英)信じられないんだ」

と、悲しそうな顔をする。

志摩子、ヒューゴを心配そうに見つめる。

○同・イギリス領事館・領事室（夜）

ワイスを中心に話し合っている館員達。

ヒューゴとロイ、端で信じられないものを聞いたように目を見開く。

ヒューゴの声「結局、アイヌの遺骨を盗んだのは事実であつた。しかも、領事も含んだ殆どの館員達が、その事実を知っており、今回だけでなく、以前から行っていたという」

ロイが止める中、ワイス達に抗議するヒューゴ。

ヒューゴの声「私が直ぐに謝罪するように抗議しても、彼らはシラを切り通すつもりでいた。学術的な事をしているのに、何故理解できないんだと、彼らを馬鹿にし、憤りすら感じているようだった。領事達にとつ

て、これはエジプトの遺跡発掘と同じだといふのだ。実際に、墓を荒らされた遺族たちが訴えてきているというのに。悪気すら感じていない。私は、同じイギリス人であったが、この時ばかりは、彼らが異界の人間のように感じた」

ヒューゴ、話し合う館員達を、悲しげに呆然と見つめる。

○同・イギリス領事館・事務室

ヒューゴ、部屋の中をウロウロ歩く。

ヒューゴの声「結局、領事達は奉行所の追及を否認し続け、建前で行った領事館の調査も殆ど隠蔽工作していた。結局、被告となった者達は無罪。だが、奉行所は納得しなかつたようだ。俺は事実を漏らさぬため、館員達に見張られる生活を強いられた。領事館の敷地からも出してもらえず、何もすることができず。ただ無闇に、時間だけが過ぎる。悔しさが募る。悔しい」

ふと、庭を見るヒューゴ。

庭の木の陰で、志摩子が手招きをしている。

ヒューゴ、目を見開き慌てて部屋を出る。

○同・イギリス領事館・庭

ヒューゴ、周りを気にしながら庭に入る。

ヒューゴ「(小声で) シマコ？」

志摩子「ヒューゴ様。こちらです」

と、木の陰から顔を出す。

ヒューゴ、志摩子の隠れている木の陰に入りしやがむ。

ヒューゴ「なぜ、ココにいるのです？ た

しか、鳴海屋さんも出入り禁止では？」

志摩子「ええ、中に入れてもらえなかったの
で、こっそり入ってきました：：ヒューゴ
様、少しおやつれになりましたね」

と、そっとヒューゴの頬に触れる。

ヒューゴ、頬に触れる志摩子の手を上からそっと触れる。

ヒューゴ「ボクは大丈夫です……シマコ」

シマコ「はい」

ヒューゴ「タツノスケに会たら、謝っておいてください。彼らは確かに盗んでいます。でも、悪いコトしてる自覚ありません。同じ、エゲレス人として恥ずかし」

志摩子「……」

と、ヒューゴの手を、そっと握りしめる。

志摩子「しっかりなさってください。私は今、あなたのようなエゲレス人がいてくれた事に、心から嬉しく思います」

ヒューゴ「うれしい？ ナゼ」

志摩子、優しく微笑む。

志摩子「エゲレスも他の領事館の方々も、実をいうと日本人の中にさえ、アイヌの人々を心では馬鹿にしています。まるで、同じ人間だと思っていないように。でも、それ

は、おかしいでしょ？」

ヒューゴ「シマコ」

志摩子「ヒューゴ様、エゲレス人は祖先の墓を荒らされても、平気なのでしょいか？」

ヒューゴ、しっかりと首を振る。

ヒューゴ「NO、エゲレスでも、神と祖先を冒瀆する卑劣な行いです」

志摩子「日本も同じです。なら、何故今回、彼らは無罪になったのでしょうか。エゲレス人も日本人も、そしてアイヌの人々も同じ人間です。例え、肌の色や目の色や、顔の違いや服の違い、言葉や信じる神が違っていても、同じく呼吸をし、ご飯を食べ、楽しければ笑い、悲しければ泣く。皆同じ、人間でございましたよう？」

と、ヒューゴの緑色の瞳をじっと見つめる。

志摩子「ヒューゴ様。何故、悪い事をしたら謝るといふ簡単な事を、彼らはなさらないのでしょうか？」

ヒューゴ「……（英）そうだな。赤ん坊でもわかる事なのに、なぜ大人になったらできないんだろう」

と、志摩子の手を握り返す。

ヒューゴ「シマコ。ありがと。大切な事を思い出しました」

志摩子「ヒューゴ様？」

ヒューゴ「ボク、もう一度やってみます。シマコ、気を付けて帰て」

と、手を離して立ち上がり去っていく。

志摩子、ヒューゴの後ろ姿を見つめる。

○「OTONASSI」・店内

林田、カップを拭いている。

聖依子、カウンター席に座り布巾を畳んでいる。

林田「へえ、その後どうなったんだ？」

聖依子「ヒューゴが江戸にいるイギリス公使と箱館のアメリカのライスって領事に、今回の事件の詳細と協力してほしいって手紙

を送ったって書いてあるの。その手紙のお
かげか、江戸のイギリス公使が仲裁に入っ
て、ライスが頭蓋骨を取り戻して協力した
んだって。結局、ワイス領事も辞任したみ
たい」

林田「へえ、すごいじゃないか！ それ、ヒ
ューゴの手柄って事だろ？」

聖依子「そのはずなんだけど。でも図書館で
調べた限りは、イギリス公使やライスの話
は事実みたいなんだけど、ヒューゴの名前
は全然出てこないの。しかも、結局盗まれ
た骨が返却されたのは、それから2年後。
しかも、本物かどうか結局わからなかった
んだって。ヒューゴも、2年間大変だった
ろうに」

林田「へえ：：でも、すごいな。歴史の裏側
って感じだ」

と、頷き、残った食器の洗い物を始め
る。

聖依子、林田をちらりと見る。

聖依子「……ね、ひろ君」

林田「ん？」

聖依子「話変わるんだけど。今度、よかったらさ。ご飯、食べに行かない？」

林田「おお、いいね。じゃあ、柗二も紗智ちゃんも誘って、どっか行くか」

聖依子「2人で行かない？」

林田「え？」

と、驚いたように聖依子を見る。

聖依子、じつと林田を見つめ返す。

林田、困ったように笑みを浮かべる。

林田「あー、そうだね」

聖依子「……」

林田「んー、でも。実は今ちよっと忙しくてさ。予定わかったら後で、連絡する感じでもいいかい？」

聖依子「あ、う、うん！ 待ってるね」

と、嬉しそうに笑う。

林田、複雑そうな顔。

聖依子、その顔を見て目をそらす。

○幕末の箱館・イギリス領事館・庭

ヒューゴ、庭の縁側に座っている。

聖依子、館員に案内されてやって来る。

ヒューゴ、笑顔で迎える。

ヒューゴの声「領事が辞任され、新しく着任したガワー領事になっても、事件は中々前には進まなかった。俺が、手紙を独自に送ったことも露見し、相変わらず領事館を出る事を許されなかった。ただ、志摩子と話すことは許された。それほど、私は憔悴していたのだろう」

ヒューゴと志摩子、館員に見張られる中、縁側で楽し気に話している。

ヒューゴの声「さすがに、辰之助には会えなかったが、志摩子は毎日のように来てくれた。奉行所の様子、街の様子、他の領事館の様子。また、店の者達の喧嘩話や、子女の間で流行っている事。夏のお祭りの事。私が退屈しないように、私の心が折れないように。彼女は、色々な話をしてくれた。

これからずっと、志摩子が傍にいてくれたらどんなに良いかと……俺は、彼女の事が愛おしい」

館員が気を利かせて離れていく。

見つめ合うヒューゴと志摩子。

やがて、ゆっくりとキスをする。

○「OTONASI」・聖依子の部屋

外は雨が降って薄暗い。

聖依子、ベッドにうつ伏せて翻訳を読んでいる。大きなため息をして、傍に置いてあるスマホを手取る。

スマホの画面は林田のLINEのトーク。

聖依子の『予定、どんな感じですか？』のメッセージが既読になっている会話で最後。

と、スマホにメールの着信画面には、「デイラン」の文字。

聖依子「デイラン？ 久しぶりじゃない」

と、メールを開く。

スマホ、画面には、日本語の文面と写真。

デイランの声「聖依子。元気だったかい？ 俺は今、イタリアで仕事してるよ。この後はEUを行ったり来たりする。たぶん日本に行けるのは1月になるかな」

聖依子、画面を睨みつけ

聖依子「1月って、あの人、本当に人に任せっぱなしじゃない……ま、私もか」

と、再び画面を見る。

デイランの声「メールありがとう。すごいな、辰之助の子孫に会えそうだななんて。やっぱり、聖依子に頼んで良かったよ。そういえば、この前、話した写真があったよ。画像を添付するから、参考にしてくれ。じゃあ、また日本で会おう！」

聖依子、添付されているファイルを開く。

モノクロの写真には、ヒューゴと鳴海

屋の暖簾がかかった大きな日本家屋と
蔵が写っている。

聖依子「これ、ヒューゴと鳴海屋……ん？ こ
れって」

と、じっと写真の蔵を見つめる。

○同・店内

聖依子、階段を降りて慌てて店内に入
ってくる。

高橋、店内の掃除を眠そうにしている。

高橋「聖依子！ 店手伝ってくれよ！」

聖依子「お兄ちゃん！ これ見て！」

高橋「ああ？」

聖依子、スマホの画面を高橋に見せる。

聖依子、写真の蔵の部分を指さし。

聖依子「ねえ、この蔵って、うちの蔵に似て
ない？」

高橋「うーん、似てない事もないけどな。で
も、こんな感じの蔵。この辺りなら、いく
らでもあるだろ」

聖依子「でも、この窓とか、奥に見える入口の感じとかさ。似てると思うんだけど」

高橋「うーん……そう言われるとな」

聖依子「ねえ、この家って、たしかお祖母ちやんの実家なんだよね？」

高橋「ん？ ああ、元々は祖母ちゃんのお兄さんが相続してたんだけどな。独身だったから、亡くなった後は祖母ちゃんが相続したんだ。でも、どうせ住まないし、丁度、店開きたいって言ったたら、貸してくれたんだよ」

聖依子「お祖母ちゃんのお姓が、オトナシだから、店の名前「OTONASI」にしたって前、話してたよね？」

高橋「そうそう。お前、よく覚えてんな」

聖依子「じゃあ、鳴海とは関係ないか」

そこに、店に林田が入ってくる。

高橋「あ！ 悪いな寛人、頼んだのあったか？」

聖依子、恐る恐る顔を上げる。

林田、カウンターに荷物を置く。

高橋、その荷物の中を出している。

林田「探したんだけど、見つからなかったわ」

高橋「まあ、しゃあねえわな。よし、とりあえず仕込みやっちゃうわ」

と、カウンターの奥にあるキッチンに荷物を持っていく。

聖依子、カウンターで作業を続ける林田を見つめる。

聖依子「ひろ君」

林田、手を止めて顔を上げて苦笑い。

林田「あっ……聖依子ちゃん。ごめん、ライン返してなかった、よね？」

聖依子「ううん、なんも大丈夫。あの」

林田「実はさ、俺、札幌に引っ越す事になったんだ」

聖依子「え……なんで、急に」

林田「ずっと、自分の店、持ちたかったの知ってるだろ？ 実は大学時代の友達が札幌で一緒に店やろうって言ってきてさ」

聖依子「そっか。すごいね」

林田「いい物件もあるし、今がチャンスかな
って。急だけど行く事にしたんだ。だから、
準備とかあるからさ、その」

聖依子、俯くも顔を上げ笑顔。

聖依子「良かったね！ 夢叶えたんだ！ い
つ頃、行く予定なの？」

林田「あっ……しばらくは、行ったり来たり
って感じで、本格的に引越すのは2月に
なるかな」

聖依子「そっか……頑張ってるね！ 私の方は
気にしないで！ じゃあ、私ちよつと着替
えてくる」

と、顔を背けて2階へと行く。

林田、聖依子の姿をじつと見る。

と、高橋キッチンから、顔をだ
して林田を見ている。

林田、それに気が付き驚く。

林田「びっくりした！」

高橋「あんまり俺の妹、振り回すんじゃないねえ

ぞ。この、顔デカゴリラが」

林田「誰が顔デカじゃ！ わかつとるわ！」

高橋「実は、まんざらでもねえんだろ？」

林田「……それは」

高橋「ま、俺は止めも応援もしない。ただ、誠実に考えてやってくれ。中途半端にされる事ほど、つらいもんもねえんだからさ」

と、キッチンに戻っていく。

林田「……わかつてるよ」

と、頭をかきむしる。

○幕末の箱館・イギリス領事館・領事室

ヒューゴ（25）、領事室に入る。

中には、椅子に座ったガワー領事や数名の館員が難しい顔で立っている。

ヒューゴの声「アイヌ遺骨窃盗事件が解決した翌年の2月。前年から続いていた幕軍と新政府軍の戦いで、幕軍が敗戦したという知らせが、イギリスの商船から入った。それは、奉行所にも届いたようで、翌日には

箱館にある各国の領事達が、前年から赴任した新しい杉浦奉行に呼び出されていた」

○同・鳴海屋・外

ヒューゴ、大通りを急いで歩く。

鳴海屋の店の前に志摩子（18）と角

田（25）がいる。

ヒューゴ、二人の傍に行く。

ヒューゴ「シマコ、タツノスケ」

志摩子「ヒューゴ様」

角田「お前も聞いたんだな」

ヒューゴ「はい。タツノスケ、奉行所はどうするつもりですか？」

角田「まだわからん。ただ、杉浦様は軍備を整えるおつもりだ。新政府軍が箱館まで来るだろうとお考えなのだろう。でも、杉浦様は賢いお方だから、安心していい」

と、笑って見せるが、顔が固い。

角田「それで志摩子殿」

志摩子「はい」

角田「しばらく、奉行所には近づかんほうがいい。危険は及ばぬが、何が起こるかわからん」

志摩子「はい、承知しました」

角田「ヒューゴ、志摩子殿を頼んだぞ」

ヒューゴ「はい」

角田とヒューゴ、互い頷きあう。

ヒューゴの声「辰之助の言う通り、杉浦奉行は大変優秀な人物だった。最後の最後まで職務を全うし、不安がる箱館の人々に大丈夫だとお触れを出していた」

○同・船着き場

英国商船ファイルヘートル号が止まっている。

奉行所の者達が、船に荷物や馬を運び入れている。

ヒューゴの声「だがその後、奉行所は箱館にやってきた新政府に明け渡される事となった。奉行所の者達は、我が国の商船で、江

戸に帰還する事となる」

船の側に立つ、ヒューゴと志摩子。旅

装束姿の角田がやって来る。

ヒューゴ「タツノスケ」

志摩子「角田様」

角田「二人とも来てくれたのか」

志摩子「角田様。どうぞ、江戸でもお元気で」

角田「ああ……志摩子殿」

志摩子「はい」

角田「共に……」

角田、じつと2人を見つめる。

やがて、諦めたように苦笑する。

志摩子「角田様？」

角田「いや……私はすぐに箱館に戻るつもり

だ。その時まで達者でいてくれ。ヒューゴ、

お前はこれからどうするのだ」

ヒューゴ「わかりません。ただ、ボクはこの

箱館に残るつもりです」

角田「そうか……なら、またこの街で会おう。

その時には、酒に付き合え、抜け駆けしお

って」

と、ニヤリと笑う。

ヒューゴ、きよとんと角田を見つめ、
苦笑い。

ヒューゴ「バレてましたか」

角田「当たり前だ。志摩子殿を頼んだぞ」

と、右手を差し出す。

ヒューゴも右手を差し出し、二人固く握
手を交わす。

志摩子、2人の様子を不思議そうに見
つめ、微笑んで見守る。

ヒューゴの声「この日が、タツノスケと会っ
た、最後の日になってしまった」

○「OTONASI」・外観

雪が降っている。

高橋、クリスマスツリーを片付ける。

高橋「うー、さびいさびい」
と、蔵の方に持っていく。

○同・蔵・中

聖依子、コートを着てぼんやりと、物を片付けている。

高橋、クリスマスツリーを持ってくる。

高橋「おい、ぼーっとしてないで、手伝ってくれよ」

聖依子「へ？ あ、ごめん」

と、高橋が持つクリスマスツリーを一緒に持つ。

高橋「正月飾り見つかったか？」

聖依子「ない。どこにしまったのさ」

高橋「わからん。上の方は探したか？」

聖依子「上？　なんで、そんな面倒くさい所に片づけたの」

高橋「この1年、就活もせずに人探ししてた人を養ってやったのは誰だ？」

聖依子「……探します」

高橋と聖依子、クリスマスツリーを下ろす。

高橋、傍にあった角松を持ちあげる。

高橋 「じゃ、宜しく。って重っ」

と、蔵を出ていく。

聖依子、面倒そうに台に乗り、上の棚に手を伸ばす。

聖依子 「ガラクタばっか……埃っぽいし」

と、埃が舞い、咳き込みながら、手前の箱をよける。

その奥に、埃まみれの蒔絵が施された古い文箱が現れる。

聖依子 「何これ？」

と、奥に手を伸ばし、文箱を取る。

台から降りて、そっと箱を開ける。

中には、古い和紙の手紙。

聖依子、一枚を手取る。

表紙には何も書かれておらず、裏返すと筆字の行書で『しまこ』と書かれている。

聖依子 「シ、マコ？」

と、スマホのラインの着信音。

聖依子、はっとしてポケットからスマ

ホを出して画面を見る。

スマホ画面には、紗智から「最後の翻訳が終わったので、パソに送ります」の文字。

聖依子、手紙を握り締め、急いで蔵を出る。

○幕末の箱館・イギリス領事館・事務室

ロイが手紙を広げて読んでいる。

ヒューゴと数名の館員、傍でその手紙を覗いている。

ヒューゴの声「ついに、江戸にいるイギリス公使から、箱館を離れるようにとの指示が下った。俺は、領事に箱館に残りたいと志願した。だが」

○同・鳴海屋・外

暖簾が片づけられた鳴海屋の戸。

ヒューゴ、静まり返った店を見上げる。
と、突然、戸が開いて志摩子が現れる。

見つめあう二人。

ヒューゴ「……」

志摩子「……」

○同・鳴海屋・蔵の側

ヒューゴと志摩子、蔵の前で人目を避けるように向かい合う。

ヒューゴ「箱館を、離れる事になりました」

志摩子「……いつ頃ですか？」

ヒューゴ「3日後には」

志摩子「そんなに早く……江戸に向かわれるのですね？」

ヒューゴ「はい。でも、ボクはすぐにイギリスに向かう船に乗り換えて、帰国するよう
に言われています」

志摩子「日本を離れるんですか？」

ヒューゴ「はい」

志摩子「……」

志摩子、おなかの辺りで拳をぎゅっと握る。

ヒューゴ、志摩子をそっと抱きしめる。

ヒューゴ「シマコ」

志摩子「……はい」

ヒューゴ「ボクと一緒に、イギリスに来ませんか？」

志摩子、はっと、ヒューゴを見つめる。

ヒューゴ「ここにいたら、戦いに巻き込まれるかもしれない。シマコだったら、英語も話せるし、向こうでもやていける」

志摩子「ヒューゴ様、でも」

ヒューゴ「戦が終わたら、また一緒に箱館に戻てくればいい。だから、一緒に行きませう？ だから、私の妻になってください」

志摩子「！」

ヒューゴ、抱きしめる手に力が入る。

志摩子、瞳が揺れ、ぎゅっと目をつぶり、そっと、ヒューゴから離れる。

志摩子、しっかりとヒューゴの顔を見つめる。

志摩子「私は、ご一緒できません」

ヒューゴ「なぜ!?」

志摩子「私は、鳴海屋の一人娘です。この家を、この箱館を捨てて、離れる訳には参りません。例え、戦が激しくなろうとも。店の者を、箱館の人々を、置いてはいけないのです」

ヒューゴ、志摩子を見つめ、諦めたように笑う。

ヒューゴ「そうですか」

志摩子「あの、でも私」

ヒューゴ「謝らないで。シマコはそう言うと思てました」

志摩子「ヒューゴ様」

ヒューゴ「なら、ボクは、必ず箱館に戻ります。その時には、私の妻になってくれますか？」

志摩子、目に涙を浮かべて笑みを浮かべる。

志摩子「はい……はい。お待ちしております。ずっと……ずっと」

と、自らヒューゴに飛び込んで抱き着く。

ヒューゴ、ぎゅっと受け止める。

ヒューゴと志摩子、しっかりと抱きしめ合う。

○羽田空港・外観

T・羽田空港

○走るタクシー・中

窓の外は首都高速道。

外を見つめる聖依子、その手には、ヒューゴのノート。

隣には、デイランが座り、ちらりと聖依子を心配そうに見る。

デイラン「どうしたんだ？」

聖依子「……べつに」

デイラン「この前、連絡くれた時も変だと思っただけだ。何かあった？」

聖依子「ううん、何でもなし……なんでも」

と、考え事をするように窓の外を見る。
ディラン、その様子をじっと見つめる。

○角田家・外観

2階建の一戸建て。

表札には「角田」。

○同・リビング

聖依子とディラン、ダイニングテーブルに並んで座る。

奥から角田真佐子（65）が箱を持って現れ、向かいに座る。

真佐子「お待たせしました」

聖依子「いえ、今日はありがとうございます」

真佐子「突然、連絡をもらった時は驚いたけど。でも、嬉しかったわ。まさか、こんな形で、祖先の事を知る事ができたんですもの」

と、笑みを浮かべ箱を開ける。

中には、一枚の古い文。

聖依子「これは？」

真佐子「我が家に代々残されてきた、辰之助の手紙です」

と、手紙を出して開いて見せる。

真佐子「辰之助は、江戸に戻った後、家督を弟に譲り、戦争が終結した後に戻ったそうです。これは、その後で弟に送った手紙だと聞いています」

○幕末の箱館・鳴海屋・外

建物のいたる所が壊れている鳴海屋。

その前に、角田が立っている。

角田の声「私が鳴海屋に着いた時、顔見知りの奉公人は殆ど残っていた。もちろん、世話になった主人も息災であった。だが」

○同・鳴海屋・中

数名の奉公人と、喪服姿の鳴無が角田を見て驚く。

角田、お辞儀をする。

奥に目をやると線香が焚かれた仏壇と
傍に女性物の着物が飾られている。

角田、目を見開く。

鳴無「角田様。よう、戻られました」

角田「あれは」

鳴無「……志摩子でございます」

角田「！」

鳴無「7日程前に、亡くなりました」

角田「7日前？ 戦で亡くなったのではない
のですか？」

鳴無「へえ……産後の肥立ちが悪く。暫くは
頑張ったのですが」

角田「産後？」

と、奥から赤ん坊の泣き声。

角田「……まさか」

鳴無「ひと月ほど前に生まれました。英津子
と申します。父親に似て、綺麗な緑色の瞳
で」

角田「緑色？ ……まさか」

と、呆然と立ち尽くす。

○角田家・リビング

聖依子、真佐子の顔をじっと見つめる。

聖依子「ヒューゴとの、子供」

デイルン「……」

真佐子「辰之助の手紙には、妊娠した事は、

ヒューゴがイギリスに帰った後に分かった

ようだと言われています」

デイルン「それで、その後。辰之助は？」

真佐子「よほど志摩子さんの事を大切に思っ

ていたのでしょうね。辰之助は、そのまま

鳴海家の養子になり、英津子を育てたそう

です」

聖依子「養子に？」

真佐子「ええ、その後の手紙はオトナシ辰之

助と言われてきていますから」

聖依子「オトナシ？ 鳴海じゃないんです

か？」

真佐子「それは屋号ですよ。苗字はオトナシ

というそうですよ。ほら、ここに」

と、手紙の一文を指さす。

そこには、『鳴無』の文字。

聖依子「あの、これってナルナシじゃ？」

真佐子「これでオトナシと読むそうですよ。

珍しい苗字よね」

と、聖依子の瞳を見て。

真佐子「あら、聖依子さん。あなたの瞳、光

が当たると緑色に見えるのね」

聖依子「！」

デイルン「……」

○羽田空港・ロビー（夜）

聖依子とデイルン、椅子に座る。

聖依子「もしかして、気が付いてたの？」

デイルン「何のこと？」

聖依子「私が、志摩子の子孫だって事。知っ

てたんでしょ？」

デイルン「……初めは、偶然だったんだよ」

と、胸ポケットから古いモノクロ写真
を取り出す。

そこには、蔵の前に立つ志摩子の姿。

聖依子、写真を受け取り、じっと見る。

ディラン「駅で君を見かけた時、どこことなく志摩子に似ている気がしたんだ。それに、瞳が緑色に見えた。それで、声をかけた。確信したのは、お兄さんのお店を見た時だ。本当、運命だと思った」

聖依子「なんで、黙ってたの？」

ディラン「最後まで、ノートを読んでほしかつたんだ。ヒューゴと志摩子がどうなったのか。ヒューゴがどんな気持ちだったか。志摩子の子孫である君に、読んで、知ってほしかった」

聖依子「……ヒューゴは、本当に志摩子の事を愛してた。志摩子も、きっとヒューゴの事をとっても好きだった」

ディラン「ああ、そして。また会えると信じてた」

聖依子「……」

ディラン「……聖依子。人の出会いって奇跡だと思わないか？ 言葉も文化も違う人間

が出会って恋をして……でも、別れも突然なんだ。伝えたい事も言えなくなってしまう。だけど、こうして再び、子孫の俺達が出会えた事がすごい奇跡だと思わないか？」

と、聖依子の顔を見て微笑む。

デイラン「俺は、聖依子に出会えて本当にうれしい。ありがとう、探してくれて」

聖依子、デイランの顔を見つめる。

聖依子「……こちらこそ、ありがとう。見つけてくれて」

と、小さく微笑む。

○五稜郭公園・中

蕾がまだ小さい桜の木。

聖依子、それを見上げる。

そこに、林田がやって来る。

林田「聖依子ちゃん！」

聖依子「ひろ君、ごめんね、引っ越しで忙しいのに。こんなところに呼び出して」

林田「なんも、いいよ。寒かったろ？ どこか、カフェにでも入る？」

聖依子、手に持っていた紙袋を渡す。

聖依子「……これ」

林田、戸惑いながらも受け取る。

紙袋の中を見ると、バレンタインのチ

ヨコが入っている。

林田「あの……これって」

聖依子「好きです」

林田「……」

聖依子「ずっと、ずっと小さい頃から。ひろ君の事、好きでした。歳も離れてるし、何度も諦めようと思ったけど。ああ、やっぱり駄目だなって」

林田「……」

聖依子「もし、よかったら私と付き合ってください。お願いします」

と、深くお辞儀をする。

林田、じっと聖依子を見る。

林田「……俺は」

風が吹く中、聖依子、林田の答えをじつと聞いている。

○函館・行啓通

五稜郭祭の幟。

道路では、大砲が鳴り、五稜郭戦争の模擬演技が始まる。

沿道には多くの客が魅入っている。

大砲の音に歓声を上げる観客の中にデイランと聖依子もいる。

デイラン「わお！ たーまやー！」

聖依子「デイランこれ、花火じゃないから」と、耳をふさいでいる。

○五稜郭公園・中

ステージが設置され、『五稜郭祭』の垂れ幕が掛けられている。

ステージ上は、吹奏楽団の演奏。

聖依子とデイラン、遠くから見ている。

デイラン「で？ 寛人とはどうなった？」

聖依子「……内緒」

デイラン「なんだ。フラれたのか」

聖依子「なんで、断定するのよ！」

デイラン「じゃあ、付き合ったの？」

聖依子、ステージへと視線を向ける。

聖依子「……演奏上手だね」

デイラン、聖依子をじっと見つめる。

デイラン「(英)俺じゃ、ダメかい？」

聖依子「だから、私、英語分らないって」

デイラン「はは、そうだった」

と、ステージの方に目を向ける。

聖依子「そういえば。結局、忘れ物ってなん

だったの？」

デイラン「ん？ ああ、そうだ、今回、それ

を渡そうと思って、持って来たんだよ」

と、カバンの中から小さな小箱を取り

出す。

デイラン「はい」

聖依子、デイランから小箱を受け取る。

聖依子、ゆっくりと箱を開ける。

中から、ペアの指輪が入っている。

聖依子「これって」

ディラン「ヒューゴと志摩子の結婚指輪。これ聖依子が持ってた」

聖依子「えっ？ ダメだよ！ こんな大切なもの」

ディラン「元々、志摩子に渡すはずの指輪だったんだ。なら、子孫の聖依子が貰ってもらわないと困るよ。それとも、別の指輪を俺が買ってあげようか？」

聖依子「へ？」

聖依子を見るディラン。

聖依子、一瞬ぼかんとするが、直ぐに顔を赤くする。

ディラン、可笑しそうに笑い始める。

聖依子「ちよっ、からかったわね！」

ディラン「ハハハ、今はそういう事にしておこうか。あ、そうだ、今回の謝礼金を送るから」

聖依子「え、謝礼金？」

デイラン「あれ、まさか、それもいらぬ？」

聖依子「いや、それは遠慮なくいただきませう！」

互いに顔を見合わせて笑う二人。

○「OTTONASI」・聖依子の部屋（朝）

聖依子、リクルートスーツ姿。

首には、ペアリングのネックレス。

○同・店内（朝）

高橋、ピアノを拭いている。

そこに、聖依子がやって来る。

高橋「面接か？」

聖依子「うん！」

高橋「いいか、落ち着いてやるんだぞ！」

聖依子「はいはい。いってきます」

と、笑顔を浮かべて出ていく。

○聖依子の車・中（朝）

聖依子、運転席に乗り込む。

バックミラーを直して、胸元から出て
いるペアリングのネックレスを見る。

聖依子「よし、やるぞ」

と、服の中にペアリングをしまい、車
のエンジンをかける。

○函館山・坂道

聖依子の車が、坂道を下りていく。

終

※作中に登場する幕末の登場人物や事件に関
しましては、一部フィクションとなります。
実際の人物や事件とは事実が異なりますので
ご注意ください。